
おりょうヶ淵

橘伊津姫

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おりょうヶ淵

【Nコード】

N7936S

【作者名】

橘伊津姫

【あらすじ】

山の中で道に迷ってしまった「僕」は、不思議な少女「おりょう」に助けられた。

おりょうと過ごした静かな時間。

しかしそれは、あまりにも悲しい結末を迎える。

自サイト「皓月迷宮」公開中作品。

僕がおりようと出会ったのも、こんな雨が降っていた日だった。旅の中で山に迷い込み、立ち往生していた僕を救ってくれたのが、おりようだった。

年の頃は五つか六つ。やせっぽちのおりようは、山の中を一人で行き来するという。それでもなければ、僕と出会う事もなかったわけだが……。

おりようの村は山間の、谷川にかかる小さな橋によって外界と繋がっている。この橋が流されてしまえば、村は完全に外界から切り離され、孤立してしまうのだ。だからというわけでもないのだろうが、村人達はどこか排他的で、最後まで僕に打ち解けてはくれなかった。

おりようは不思議な子だった。生まれてすぐに両親を失くし、生まれつき声を出す事が出来なかった。

今は村はずれの、辰ヶ淵神社の宮司のお宅にやっかいになっている。村人でさえ迷ってしまうような山の中を、遊び場にしておりようは育った。山の動物達はおりようを傷つけることなく、良き友人となったようだ。

山の中腹に、竜神が棲むという辰ヶ淵がある。そこで獰猛な山の動物達と戯れる、おりようの姿を村人はよく目にしたと言う。

宮司は言っていた。「おりようは、生まれながらの竜神の巫女かもしれない」と。それは、あながち的外れな意見ではないと、今でも僕は思っている。

僕がその村を訪れたとき、村は本来なら余計な食い扶持^{ふち}を養う余裕はなかったはずだ。降り続く長雨のせいで、それだけでなくも痩せた田畑は収穫が見込めず、山の恵みも僅かなものだった。そんな状態で僕が村を放り出されなかったのは、ひとえに、僕を連れてきたのがおりようだったからに他ならない。

村人達は、おりようの不思議な力を気味悪がり、そして畏れていたのだ。だから、山に迷い込んだ僕を幼い子供のおりようが連れ帰ったとき、反対意見を口に出す者はいなかった。

おりようを刺激しないように、なるべく関わりにならないようにと。

人間は、自分たちと違う何かを持った相手に出会つと、なぜあても交わりを絶つととするのだろうか？

宮司の家にやっかいになりながら、僕はおりようと仲良くなつていった。言葉は話せないけれど、おりようは頭の回転の速い子だった。僕が話す言葉に可愛らしい丸まっちい文字で答えてくれた。

「いつもどこで遊んでいるの？」

『りゅうじんさまのおいけ』

「誰と遊ぶの？」

『やまのみんなと、りゅうじんさま』

「山の皆は、優しくしてくれる？」

『うん。ときどきね、しかられるの。まいごになるから、あんまりとおくまで、ひとりでいつちやいけませんって』

おりようには、動物の言葉が解るのか。おりよう自身は、当たり前のように文字を記していく。

『おてんきがよくなつたら、やまのみんなにあいにいこ？』

僕が行つても、果たして受け入れてもらえるかどうか……。僕が一寸、返事に詰まつたのを感じ取ると、おりようの筆がためらいがちに動いた。

『いや？』

他人に囲まれて生活しているおりようは、何気ない仕草や間の取り方で相手の気持ちを量る癖がついているらしい。

幼いながらに彼女は、村人達が自分の事を好いてはくれない事を察している。そして彼女なりに、これ以上嫌われないように努力しているのだ。

僕はその事に思い至つて、胸が痛くなつてしまった。まだ、両親

に甘えたい盛りの少女が、周囲に気を使って生きていかなくてはいけない。それはどんなにか息苦しい生活だろう。

「嫌じゃないよ。僕じゃなくて、皆の方が嫌かなと思っただけさ」
僕の返事に、おりょうの顔がパアツと明るくなった。

『そんなことないよ。みんな、よろこぶよ。ぜったいだよ。やくそくだからね』

「うん。約束だね」

おりょうと僕は、しっかりと指きりをした。

それが果たせなくなる約束だなんて、その時の僕もおりょうも、夢にも思わなかった。

村と外界を繋ぐ橋の架かった谷川は、辰ヶ淵から流れ出している。長雨が続きと辰ヶ淵の水が溢れ、谷川の水嵩みずかさも一気に増えると言う。万が一、橋が流れてしまつては大変だ。村人は川の水嵩が増すと、交代で橋の見回りに出た。

どうとうと音を立てて流れる川は渦を巻き、さながら竜が身をくねらせて谷を渡っているようだ。僕は天を仰いだ、厚く垂れ込めた暗雲に切れ間はなく、雨もやむ気配すらない。

おりょうも雨天続きで遊びにも行けず、つまらなそうにしている。「よく降る雨だね。いつになったら、やむんだろっ」

僕がおりょうに話しかけると、彼女は側にあつた雑誌に、こう書き記した。

『りゅうじんさまのきがすむまで。おりょうがあそびにいかないから、やまのみんなもあそびにいかない。だから、りゅうじんさまはさびしがってる。でも、あめだから、おりょうはでられない』

なるほど。それはややこしい事になっている。雨のせいで誰も遊びにこない事に拗すねた竜神が、更に雨を降らせていると言うのだ。飯にも「神」ともあろうものが、そんなに大人気なくていいものだろうか？

……いや。大人気があつたら、そもそも「神」なんていう面倒

な事はやってないか。などと、不謹慎な事を勝手に考えてみたりもする。いずれにせよ、雨がやまない事だけは確かだ。

その頃から、宮司の家の一角に、村人達が集まるようになっていた。

「宮司様。このまんまじゃ、いずれ橋は流されちまう。どうにかせねば」

「どうにかっちゅうても、どうすればいいんだ？」

「今年は田畑の実りも少ねえ。山に入っても、いつものようにはいかねえ。こんな状態で橋が流れたら、それこそ村は飢え死にだ」

「宮司様、どうしたらええんじやろう？」

村人達から、いつせいに目を向けられた宮司にも、何かいい知恵があるわけではない。考え込んでしまった宮司に、誰かがポツンと呟いた。

「　　いつそ、人柱でも立てて……」

その場の空気が一瞬にして凍りつた。

「人柱」　　生贄を生き埋めにして橋や建造物の守り神にする。その習慣は、現代でこそ行なわれなくなったが、その頃の地方の集落では、まだまだ生きていた。いや、地方だけではなくたのだろう。都市部でも、おそらくは行なわれていたのではなからうか。それだけ、この「人柱」という手法がこの国に深く根付いていたという事だ。

「馬鹿な。それに、誰を人柱にするというんだ」

何人かの村人から、反対意見も出た。しかし「人柱」のひと言は、その場にいた全員の胸に重く響いたのだ。

なんの解決策もないまま村人を解散させた宮司は、囲炉裏端に座って遊んでいた僕とおりの側にやってきた。

「おりよう、今日は何をして遊んで」

おりように話しかけようとしていた宮司の目が、先程おりようが書いた雑紙の上に落ちた。

「これは？」

僕が目をやると、それはおりようが竜神様について書いた紙だった。

「ああ。それはさつき、僕がいつまで雨は降るんだろうね？ と聞いた時に、おりようが書いたんです。子供って、面白い事考え付きませぬ」

「あ、ああ。そうだね……」

僕の答えを聞きながら、宮司は上の空で返事を返した。

荒れ狂う谷川の猛威に耐え切れず、とうとう橋が落ちたという連絡があったのは、その日の夜更けの事だった。

駆けつけた村人達は呆然と、ポツカリと口を開けて横たわる谷川の暗闇を見ていた。岸にしがみつくようにして残っている残骸が、ここにさつきまで橋があった事を物語っている。

一向にやむ気配のない長雨と、収穫の少ない田畑。そもそも備蓄の多くを、山の実りで賄^{まかな}っていた村人達にとつて、実りの恵みが少ない年があるなどは、考えてもみなかった事なのだ。カツカツの生活を強いられていた村人は、橋が流されてしまった現実を目の前にして、感情が爆発してしまった。

「何で、今年に限ってこんなに雨が續くんじゃ！？」

「山に入っても、ちつとも獲物が手に入らん。山菜だってわずかにしか取れん」

「そのうえ橋が流されてしまったんでは、麓の村まで谷沿いの山道を歩かにやあならん。それでは、荷物を背負って戻ってくるのは無理じゃ」

「どうして、こんな事になってしまったんじゃ！？」

抑えていた鬱憤^{うつぶん}が、重石^{おもし}が取れてしまったかのように溢れ出す。

「誰かが、竜神様を怒らせたんじゃ！」

老人の悲鳴のような声が雨の中を貫いた。一斉に声のした方へと顔を向けると、人垣の後ろの方から、一人の老人が進み出てきた。

「庄屋さま……」

僕の隣に立っていた宮司が、老人を認めて呟いた。庄屋さま、とは村長の事で、村一番の分限者^{ふげんしゃ}である。八十歳に手が届こうかというお歳だが、鬘^{かみ}鑲^{じやう}としており、そこらへんの若い者よりも元氣に見えた。ただ、さすがにこの時は、相次ぐ変事にやつれて見えた。

「これは、誰かが辰ヶ淵の竜神様を怒らせたせいに違いない。そやつ^{そやつ}のせいで、竜神様が雨を降らせ続けているんじゃない！ そやつを探し出して、責任を取らせよ！」

目が違う。余所者の僕を胡散臭く感じながらも、表面上は礼儀正しく接してくれた庄屋さまの目ではなかった。常軌を逸してしまった、血走った目。

「このままでは、村は飢え死にしてしまう。その前に、竜神様を起こらせた奴を見つけ出して、差し出すんじゃない！」

庄屋さまの暴走してしまった感情の昂^{たか}ぶりが、徐々に村人達にも伝染していった。

「そうじゃ……。きっと、そうじゃ！」

「一体誰が、竜神様に」

「村を滅ぼすつもりか！」

あちこちで、責任の擦り付け合いが始まった。お前があの時、こんな事をしたから。いやいや、お主こそ、あの時こんな事を言ったではないか。

何と浅ましい……。否、これこそが人間の本質なのかもしれない。

「宮司さま。何でこんなになるまで、竜神様を放って置いたんじや。お主、竜神様をお守りして、お祀りするのが本分じやろに！ お主が怠けたせいで、竜神様がお怒りになったに違いないわい！」

理性がどこかへ飛んでいってしまったらしい老婆が、宮司を指差して叫んだ。批難は、瞬間に宮司へと移った。何本もの腕が、宮司の濡れた着物を掴む。引き摺り倒そうとする村人達に向かって、僕は声を張り上げた。

「何言ってるんですか！ そんな非科学的な事！ 竜神なんて、本当にいるわけないでしょう！ 長雨だって、天候不順のせいだ。竜

神が怒っているから雨がやまないなんて、いい歳をした大人が、何を子供みたいな事を言っているんだ！」

宮司を捕まえている腕を払いのけて、僕は彼を庇おうとした。

「うるさい！ 余所者は黙っておれ！」

「余所者が口を挟む問題ではないわ！」

どこからともなく、石が飛んできた。棒切れが肩に当たる。余所者のくせに……余所者のくせに……。四方八方から石が投げつけられる。

「止めてください！ 止めて！ 止めるんだ！」

大きく叫んだ瞬間、僕の額に大きめの石が投げつけられた。ゴツ、という鈍い音。そして衝撃。熱を持ったように疼く額から、生温かいモノが流れ出した。

僕が怯んだ、その時。僕の目の前にいた男が、僕を指差して言った。

「お前か……。お前がこの村に来たから、竜神様がお怒りになったんだ。竜神様を信じない、お前がこの村にやってきたから」

皆の目付きが変わった。殺気立った目。怒りに燃える目。違うと言いたかったが、石をぶつけられた衝撃で、頭がくらくらして何も言えない。伸ばされた腕が、僕を引き摺り倒した時。

「違う！ その人じゃない！ おりよう。おりようなんだ！」

僕は聞こえてきた声を信じられない気持ちで聞いた。叫んでいるのは宮司。凍りついた村人の間から、彼がしゃべっているのが見えた。

「おりようが竜神様をお慰めしないから、こんな事になったんじゃ。悪いのは、その人ではない。おりようなんじゃ」

何を！ 違う！ おりようは悪くない！ 両親に先立たれて、言葉もしゃべれず、村人にも受け入れられず、それでも一生懸命に生きてきた、たった五つのおりように、全ての罪を着せると言うのか！！

泥の中でもがき、自分の血と泥で斑になった視界で、僕は宮司の

姿を探した。叫ぼうと口を開けたが、雨と泥が入り込んできて言葉にならない。でも、おりようが……。何も悪くないおりようが……。僕はそのまま、意識を手放してしまった。

結局僕は、おりようのために何もしてあげることが出来なかった。

次に僕が目を覚ましたのは、宮司の家の土蔵の中だった。どんなに叫んでも、誰一人としてやってはこない。こんな事をしている間にも、おりようがどれだけ酷い目にあっているか……。僕は必死で柱に縛り付けられた縄を解こうとした。

僕が大声を出しながら身をよじっていたとき、山全体が震えたような音がした。

何とも形容しがたい音。

山が生きているような、何かを悲しんでいるような、そんな音だった。

そして僕には解ってしまった。その瞬間、おりようの命が絶たれた事だ。

僕が手間取っている間に、全ては終わってしまったんだ。

ここからは後から聞いた話。

村人達は意識をなくした僕を縛り上げ、宮司の家の土蔵に縛り付けた。そして、眠っていたおりようを叩き起こすと、訳もわからずにいる彼女を風呂にいれ、白装束に着替えさせた。

幼いながらも、おりようは村人達の殺気立った雰囲気を感じ取ったのだろう。抗ったりはしなかったのだという。宮司はおりように事の顛末を話して聞かせた。意味は解るまいを思っていたらしい。ただ、どうして自分が死んでいくのか、何も知らずにいるのは理不尽だと宮司は考えたのだと言う。ならば「村のために死んでくれ」というのは、理不尽ではないというのか？

おりようが川岸までやってくると、そこにはすでに人柱用の穴が掘られていた。

まったく、手際のいい事だ。

宮司がおりようを促すと、おりようは彼の顔をじっとみつめていたらしい。これから自分を殺そうとしている相手の顔を。そして宮司は、その真っ直ぐなおりようの瞳を、最後まで見ることはできなかったそうだ。

幼いおりようは穴の中に降ろされた。抵抗する素振りも見せず、諦めたような表情で、静かに手を合わせていたんだそうだ。まるで彼女のその姿が自分達を責めるように感じたのか、それとも早く見えなくなつて欲しかったのか。

小さなおりようの姿は、どんどんかけられる土に埋もれて見えなくなつていった。

最後の土が穴にかけられた時、山が震えた。明け方の白み始めた空に、山鳥達が一斉に舞い上がった。得体の知れない音が、空気を振動させている。^{あいせき}それは、山に住むすべての動物達が、おりようの死を悼む哀惜の声だった。

それを聞いた時、村人達は胸の中で「やってはいけない事」をしでかしてしまった、という気持ちが芽生えたらしい。祈祷をしている宮司を残して、ひとり、またひとりとその場を去つていった。

そして谷川には、宮司の祈祷する声がいつまでも響いていた。
これが僕の聞いた話。

すべてが終わつてから僕は土蔵から出された。

村人も僕も、村から出て行く事を望んでいたが、橋が出来上がらなくてはどうしようもない。互いが不満を抱えたまま、僕はもうしばらくこの村に滞在する事を余儀なくされていた。

でも僕に、出来上がった橋を渡る勇氣はあるだろうか？ あの幼い少女の上に出来上がった、新しい橋を？

そして村には次なる変調が現れていた。

おりようを人柱として捧げたその日から、猟師達の罾に獲物がまったく掛からなくなつたのだ。動物の姿がパツタリと見えなくなつ

た。山の恵みである山菜も姿を消した。たまに見つかっても、立ち枯れた状態。

山は完全に、村を見放していた。

何より、おりようを捧げた事で竜神の怒りを解き、雨をやませてもらおうと考えていた村人のアテが外れた。雨は、いまだに降り続いている。尚、やむ気配はない。

「私は間違っていたんでしょうか？ そんな気がしてしまうのです」
窓辺で空を見上げていた僕に宮司が話しかけてきた。

「気付くのが遅すぎやしませんか？」

宮司の家に世話になっているとはいえ、愛想よく出来る状態ではなかった。

「最近、村人達が言っています。山に入っても獲物が取れなくなつた。山菜はおるか、木の実すら手に入らない。自分達は山の神の怒りに触れるような事をしてしまったんだろうか、と」

「いまさらじゃないですか。おりようが竜神の巫女だと言ったのは、貴方ですよ」

「そう。だから、おりようを捧げれば竜神は鎮まると思ったんです。でも、違つた……」

「竜神はおりようが好きだった。山の動物も、おりようが好きだった。ただそれだけです」

吐き捨てるように言つた。宮司に言つても詮無い事なのは良く分かっている。でも、どこかにぶつけなくては、自分が怒りでどうにかなつてしまひそうだ。

僕は、何も出来なかつた自分に怒っていたのだ。僕は二度も彼女に助けられたのに、何もしてやる事が出来なかつた。宮司にぶつけた怒りは、本当は僕自身にぶつけた怒りでもあった。

窓に面した裏庭に、村の女性と子供が入ってきた。僕達を認めると、軽く頭を下げた。

宮司は窓を開けて声を掛ける。女性は申し訳なさそうに返事をした。

「すみませんです。こちらだと伺ったもんで……」

蓑笠を被った女性は後ろにいた子供を押し出した。おりょうよりも、少し年上の少女。泣き腫らした目が真っ赤だ。

「この子が……いえ、この子だけじゃないんですが……不思議な事を言い出したもんで」

女性は明らかに戸惑っている。少女はまだしゃくりあげていた。「どうしたんだね？」

宮司の言葉に、少女は途切れ途切れに答えた。

「おりょうがね。竜神様とお話をしているの。夢を見たの。あたしだけじゃないよ。皆、見たって」

その言葉を聞いた宮司の顔色が変わった。窓から身を乗り出すと、女性に向かって怒鳴った。

「村中の子供を連れてくるんだ。うちの土間に集めなさい。早く！」

女性は宮司の声に打たれたように走り出した。話していた少女は、身を縮めて立ちすくんでいる。僕は彼女に話しかけた。

「おいで。そんな所じゃ寒いだろ？ 表から回って、中に入っただい」

少女はうなづく、裏庭から出て行った。宮司と僕は急ぎ足で表に回り、入ってきた少女を出迎えた。

「こつちへおいで。もう少し、詳しく話を聞かせて。夢を見たんだね？」

僕の言葉に少女は話し始めた。

まとめると、こうだ。

夢の中でおりょうは、とても綺麗な声で誰かに話しかけている。いや、正確には頼んでいるのだ。

泣きながら懸命に「村のみんなを許して」と懇願していると言うのだ。するとおりょうの前に、ひとりの男の人が現れて「絶対に許すことは出来ない」と怒り出す。

するとおりょうは「ずうっと一緒にいるから。どこにも行かないから、村のみんなを許してあげて。もう雨を止めて」と男に頼むの

だ

そして目が覚めると、ドキドキして悲しくて、涙が止まらなくなってしまうた。

……という事らしい。そうこうしている間に、村中の子供達が集められた。

子供達は皆、真っ赤に目を泣き腫らしている。そして口々にこう言った。

「おりょうの魂を、竜神様の所へ連れて行ってあげて」と……。

僕とおりょうの話はここで終わる。まだ続きは出来上がっていない。

なぜなら、僕は今、この村であるものを作っているから。これが出来上がったとき、この話に続きが生まれるのかもしれない。

とりあえず、雨は上がった。おりょうの祈りが通じたのだろう。

村人達は自分達の犯した、間違いに気が付いた。それに気付かせてくれたのは、おりょうと同じ、澄んだ目をした子供達。

村人達は橋の袂たもとにおりょうの供養のため、小さなお地蔵様を建立した。

小さな女の子が、静かに微笑む姿のお地蔵様。形式が違うかもしれないが、そこは勘弁していただこう。僕みたいな素人が、見様見真似で彫ったモノだ。

それでも、朝な夕なに人々は花を供え、香を焚く。自分達の犯してしまった罪を忘れないように。そして、自分達のために静かに逝ってしまった少女の安息を祈って。

僕はただ一心にノミを振るう。

今作っている二体目のお地蔵様は、辰ヶ淵に沈めるための物だ。おりょうの魂と竜神が二度と離れ離れにならなくてもいいように、このお地蔵様を沈めるつもりなのだ。

村中の子供達が、一夜にして同じ夢を見たあの日から、辰ヶ淵は「おりょうヶ淵」と呼ばれるようになった。

村を守る少女を忘れないように。

く
完
く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7936s/>

おりょうヶ淵

2011年8月11日03時39分発行